

Branch Atheromatous Disease (BAD) における麻痺進行例のリハビリテーションと予後
Outcome of rehabilitation in BAD patients with the stage of progressive stroke

鶴井慎也¹⁾、中島崇暁¹⁾、神澤孝夫²⁾、風晴俊之¹⁾、美原盤³⁾

1) 脳血管研究所美原記念病院リハビリテーション科

2) 脳血管研究所美原記念病院脳卒中部門

3) 脳血管研究所美原記念病院神経内科

[はじめに] BADは進行すると重度の後遺症が残存し、退院後のmRSが0-2となる患者割合は少ないと言われている。しかし実臨床においては、麻痺は残存するものの、生活動作が獲得される症例は少なくない。今回、BADと診断された患者の身体機能、ADLの予後について検討した。

[対象] 平成23年4月から平成25年6月の間に当院急性期病棟に入院した初発脳梗塞患者のうち、発症前ADLが自立しており、レンズ核線条体動脈領域あるいは傍正中橋動脈領域のBADと診断された40名を対象とした。

[方法] 調査項目は、入院日数、退院時FIM、退院時mRSとした。さらに入院後、麻痺が進行した群を進行群（19名）、進行しなかった群を非進行群（21名）に分類し、進行群は入院時、進行後、退院時の3時点で上肢Brunnstromstage (BRS) を比較した。

[結果] 入院日数は、 44.3 ± 32.2 日（進行群： 54.6 ± 32.5 日、非進行群： 35.0 ± 29.6 日）であった。退院時FIMは、 115.7 ± 17.1 点（進行群： 117.7 ± 8.0 点、非進行群： 121 ± 9.6 ）であった。退院時のmRS0-2の患者割合は77.5%であった。進行群の、入院時の上肢BRSは、I-II 20.0%、III-IV 40.0%、V-VI 40.0%で、進行後はI-II 63.6%、III-IV 9.1%、V-VI 27.3%、退院時はI-II 33.3%、III-IV 11.1%、V-VI 55.6%であった。

[考察] 入院後、麻痺が進行した患者は重篤な麻痺を呈することが多かったが、退院時には麻痺自体が改善する症例も多かった。BADにおいては退院時mRSが0-2の患者は30%程度と報告されているが、本研究では70%を超えており、退院時のFIMも良好な結果であった。